人口5,000人の町のｺﾐｭﾆﾃｨFM「ﾗｼﾞｵﾆｾｺ」の可能性

～「聴くだけじゃない。出るﾗｼﾞｵ！」でつなぐ地の人と移住者～

北海道ニセコ町　大野　百恵

１　はじめに

住民がそのまちに住むことを誇りに思い、子どもたちが生まれつづける持続可能なまちづくりを進めるためには、移住者と元から住んでいる住民（以下、地の人）が価値観の相違を乗り越え、ともにまちづくりを進めることが必要ではないか。

7年前に札幌からニセコ町に移住し、役場職員になったときに感じたことは「移住者が非常に多い町」ということだった。町主催のイベント・講演会への参加や公募委員への応募はほぼ移住された方からで、職員になって最初の2年は移住者と関わることが多かった。5年前に町の郊外に引っ越し、町内会活動の中で地域の掃除や草刈り、地域のお祭りの事務局をするのは地の人が多いことを知った。そして、地の人が移住者に対して様々な感情を持っていること、価値観がずいぶん違うことがわかってきた。

2018年7月に担当業務で、町民ワークショップを開催した。町民26人（高校生2人含む）が参加し、ニセコ町民が抱える「普段の生活における課題や悩み、不安」について、それぞれ住民の立場から意見を出し合った。このとき、2050年に抱える不安として、人間関係が希薄になっていないか、コミュニティは維持できているかといった交流の低下への懸念、外国人の増加への戸惑いがあり、解決できたらうれしいこととして、住民の交流の場づくり、外国人住民・観光客との円滑なコミュニケーションが挙げられた。

本レポートでは、どうすれば移住者と地の人をつなぐことができるのだろうか、という問題意識から、2012年3月にニセコ町で開局したコミュニティFM「ラジオニセコ」が果たす役割や課題を関係者にヒアリングし、ニセコ町が地の人・移住者双方にとって「住むことが誇りに思えるまち」であり続けるために、今後の提案を行いたい。

２　ニセコ町の概要

ニセコ町は、町の総面積197.13km^{2}のうち13.5%がニセコ連峰や羊蹄山といった国立・国定公園に指定された自然豊かな山岳リゾートである。人口は4,958人（2015年国勢調査）で2010年比2.8%増と2000年以降、多くの自治体が人口減少する中、微増傾向にあることが特徴で、特に外国人310人（2018年11月末）と外国人住民はここ10年で約10倍になり国際的にも評価が高まっている。

基幹産業は観光・農業で、観光客数は167万人（2017年度）、外国人延宿泊数22万人泊（2017年度）と、観光客の部分でも外国人が増えている。

町政においては、2001年に全国初の「まちづくり基本条例」を施行し、「住むことが誇りに思えるまちづくり」を基本理念に、「住民参加」と「情報共有」の2大原則によるまちづくりを進めてきた。町総合計画「小さな世界都市」から「環境創造都市」へ、2014年環境

モデル都市選定、2018 年 SDGs 未来都市、自治体 SDGs モデル事業に選定されるなど、最近は環境政策に積極的に取り組んでいる。

3　コミュニティＦＭラジオとは

１つの市区町村の区域での需要に応えることを目的に 1992 年に制度化された超短波放送で、住民のコミュニケーションや意見調整を促進する公共メディアである。東日本大震災以降は地域に密着した災害・防災情報の発信拠点として再評価されている。

日本で初めて開局したコミュニティ FM は函館の FM いるかで、地域情報の受発信拠点として、地域情報を提供することによって地域の活性化、地域文化の向上に資する放送メディアとして各地で開局が相次いだが、資金面から閉局に追い込まれる放送局もある。

4　ラジオニセコとは

ニセコ町では、電話回線を通じたオフトーク通信を利用し、町の情報を町民に提供してきたが、機器の老朽化により 2008 年 12 月に廃止した。その後、防災無線や IP 告知端末など様々なツールを検討した結果、役場からの情報提供のほか地域のコミュニティ活動を情報面から支援し、活動の活性化に寄与できるコミュニティ FM を選択した。ニセコ町は北海道全域を対象としたラジオ放送の電波が入りにくいこともあり、町内で明瞭に聴けるラジオ放送が求められていた。

2012 年 3 月 31 日に地域の子どもたちの声とともに放送開始。町民が中心となっているラジオニセコ放送劇団によるラジオドラマや町民パーソナリティによる番組など「聴くだけじゃない。出るラジオ！」を合言葉に、町民全員参加を目指している。

表１にラジオニセコの 2018 年度タイムテーブルを示す。朝のニセコモーニングは情報

表１　ラジオニセコ 2018 年度タイムテーブル

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
閉局		営　業　日						休業日
	00:00	Niseko Music Train 00:30:00から、1時間おきにCM2分 06:59:30より放送開始ジングル					Niseko Weekend Radio	Niseko Weekend Radio
放送局 営業時間 月曜日～金曜日／土曜日09：00～	06:00							
	07:00	ニセコモーニング						
	2時間～	役場からのお知らせ(07:50～08:00)						
	09:00	Niseko Juke Box 09:30:00から、1時間おきにCM2分					ニセコ カラフルサラダ 役場09:50～	ニセコ カラフルサラダ 役場09:50～
	10:00						Niseko Weekend Radio	Niseko Weekend Radio
	11:00							
	12:00	Niseko Amusic Lounge					ニセコ ラジオカフェ 役場12:10～	ニセコ ラジオカフェ 役場12:10～
		役場からのお知らせ(12:10～12:20)						
	13:30					ひろこの 音部屋	公開生放送	公開生放送 再放送
	14:00	ＤＪ７６２					ニセコ カラフルサラダ 役場14:50～	① 再放送 役場14:50～
		世界音楽 めぐり	歌謡 クロニクル	ミュージック ロード	三角山 ミュージシャンズ	吹奏楽 ミュージアム		
	15:00	Kira綺羅Niseko				①国際交流員 番組 役場15:50～	ボランティア パーソナリティ 番組	② 再放送
		役場からのお知らせ(15:50～16:00)						
	16:00	地域おこし 協力隊	ニセコなヒト	ニセコなヒト	ニセコなヒト	②土香る会／羊蹄まちしるべ研究塾／ボランティア パーソナリティ	ボランティア パーソナリティ 番組	③ 再放送 役場16:50～
	1、3週							
	2、4週		コミュニティ スクール	ニセコ交番 有島記念館	アレラジ 4週目のみ			
	17:00	ＤＪ７６２					Niseko Weekend Radio	Niseko Weekend Radio
		レコードアワー	アコースティックジェネレーションズ	Collection J	週間JAZZ 日和	サーフィン ラビットS		
閉局	18:00	Kira綺羅Niseko(再放送)				③ボランティアパーソナリティ番組		
		役場からのお知らせ(18:50～19:00)					役場18:50～	
	20:00	Niseko Music Train 20:30:00から、1時間おきにCM2分					Niseko Weekend Radio	
		3月、6月、9月、12月　ニセコ町議会放送有り 行政報告、一般質問、執行方針　同日20:00より放送						
	24:00							

特化型、夕方の Kira 綺羅 Niseko は番組出演特化型となっている。

写真１　ラジオニセコ局舎

経営は公設民営で、放送運営は株式会社ニセコリゾート観光協会（以下、観光協会）が行っている。人口 5,000 人の小さな町のラジオ放送運営は広告収入だけでの継続的な運営は難しいため、町として費用面で全面的に支援している。2018 年度の事業費約 3,000 万円のうちラジオニセコ独自の広告収入は 1 割の 300 万円、残りの 9 割は町からの委託費や補助金で賄っている。

写真 2　配布されているラジオ

防災ラジオとして町内の全世帯、全事業所に無料配布されており、災害時に情報が流れる。2018 年 9 月 6 日に発生したブラックアウト時にはラジオニセコからいち早く情報を発信し続け、町民から高く評価された（図 1）。

地域ＦＭ 生活情報伝え続ける

道新 H30. 9.14

胆振東部地震の発生後、後志管内の地域ＦＭ２局が情報発信に奮闘した。ラジオニセコ（ニセコ町）は少人数のスタッフが不眠不休で生活情報を伝え、ＦＭおたる（小樽市）も機材の電源確保に苦労しつつ放送を続けた。

ラジオニセコの宮川博之局長(46)は地震の直後、ラジオ局に急ぎ、午前４時前に放送を開始。今年入局した佐々木恵さん(40)、中鉢優月さん(23)も駆け付け、役場や警察から届いた停電や断水などライフライン情報を中心に伝えた。

「落ち着くように」「まだ暗いので注意を」。聴き手に寄り添い、３人で交代しながら放送。「ニセコに今必要な情報を見極めながら話した」と佐々木さん。中鉢さんは「ふだん読まない文言なので言葉遣いに注意した」。特番は翌朝まで続いた。温浴施設勤務の30代女性は「給水所やトイレの情報が役立った」と振り返る。

地震発生から不眠不休で生活情報を伝え、町民の信頼を高めたニセコラジオのスタッフ。（左から）宮川局長、中鉢さん、小林さん、佐々木さん

リスナーからはガソリンスタンドやコンビニなどの情報が寄せられた。「こういう状況だから明るい音楽を」との要望にも応えた。ニセコ駅前で夫婦で商店を経営する小松優喜恵さん(52)は「聴き手をリラックスさせようとする局の姿勢が伝わった」と話す。

「ラジオニセコがあって良かった」。宮川さんは多くの町民から礼を言われた。「みんな聴いていてくれた。ラジオの力はすごいと改めて感じた」。来春には現在インターンとして週３回勤める大学４年、小林愛菜さん(札幌)が入局。戦力アップに期待がかかる。

ラジオニセコ・ＦＭおたる　住民協力、感謝の声も

ＦＭおたるは午前３時25分、市内入船のスタジオに偶然いた総合プロデューサー村岡啓介さん(42)が生放送に切り替え、市や北電からの情報を届けた。

機材は内蔵バッテリーで１、２時間しかもたず、用意していた自家発電機を稼働。市内手宮の送信所の機材もバッテリー残量が約１時間しかなく、村岡さんはスタッフにスタジオを任せ自家用車で送信所に行き、自家発電機を動かした。

燃料補充やスタッフの休憩のため、送信所からも初めて実際に放送した。発電機の燃料となるガソリンの備蓄に限りがある中、市民からガソリンの提供を受けて停電の時間帯を乗り切り、８日午後５時まで途切れずに特別放送を続けた。

村岡さんは「８月に停電した際、市民から『もっと早く放送してほしかった』と指摘された。今回はいち早く放送しようと考えた」と振り返った。

（平田博治、西出真一朗）

図１　北海道新聞小樽後志欄（2018 年 9 月 14 日）

５　「出るラジオ」としての原点～ラジオニセコ立ち上げのプロセスから

ニセコ町役場では、2011年4月にコミュニティFM立ち上げのためにコミュニティFM推進係を新設し、町民、観光事業者などからなる7人の委員とともにコミュニティFMの検討会議を開始した。このとき担当となった役場職員は、自分自身も小樽からニセコ町に移住し、地域と関わる中で、地域の一員として地の人と一緒に最後の決断まで行うという覚悟ができるようになった経験から、町民やニセコに関わる多くの人が交流できる、今までにない新しいコミュニティをつくろうと考えた。

検討会議では新しい放送局の名称を「ラジオニセコ」とし、コンセプトを一言で伝えられるキャッチフレーズとして「聴くだけじゃない。出るラジオ！」につながる議論がなされた。この検討会議には、札幌のコミュニティFM三角山放送局が委員の一人として関わっていた。三角山放送局は、身障者がパーソナリティを務める番組や、刑務所に服役する受刑者からのリクエスト番組など多様な番組づくりをする放送局で、三角山放送局の委員からはいかに多くの方に参画してもらうかという視点から様々なアイデアが出された。

立ち上げ時の担当職員は、「今まで町の文化まつりやカフェでのコンサートなど限られた場所で活動していた方もラジオニセコを通して発表の場ができた。ラジオニセコは『出す』ではなく『出る』ラジオ。自らの行動が必要だが、なるべくその敷居を低くして多くの方に出演してもらいたい」と考えている。

６　地の人とラジオニセコの関わり

（１）ラジオニセコに出演する地の人

「出る」ラジオとして、ラジオニセコで番組を持っているボランティアパーソナリティは累計85人（うち20人が外国人、40人ほどが現在も番組を持っている）。ほとんど移住者だが、中には地元の農家の方もいる。

ニセコ町で生まれ育ち、中学生のときにラジオニセコでインターンを行った子供が、高校3年生になって「高校卒業したらニセコ町を離れるからその思い出に」と今夏の夏休みに手伝いに来て、高校生パーソナリティとして活躍した。ラジオニセコの局長は「ラジオニセコとしても職員が少ないときでとても助かった」とうれしそうに教えてくれた。

（２）ラジオニセコで紹介される地の人

ラジオニセコでは、有島記念館（大正時代の文豪、有島武郎作品や無償開放した有島農場の足跡を紹介する公営施設）の友の会的な位置づけである「土香る会」の番組を毎月1回収録して放送している。土香る会の会員数は、町外含めて個人62人、1法人（2018年10月末）で、当初役員を務めていた地の人の高齢化に伴い、役員が移住者に世代交代しつつあり、移住者の会員も増えてきている。

番組の中身は次の3つのコーナーを中心に構成し、前後を会長と事務局長2人のMCでつなぐ形で、ゲストからのリクエスト曲もかける。①「土香る会からのお知らせ」、②「この人に聞く」、③「有島記念館からのお知らせ」。一番力を入れている「この人に聞く」コーナーでは、有島農場の資料保存を行ってきた有島謝恩会や過去に土香る会をリードしてきた地の人、有島文学の研究者など有島を切り口に多種多様なゲストを招いている。ゲスト

とは事前に打ち合わせもするが、収録時は毎回予想を超えた話題が多く、文学作品だけでなくゲストその人なりの創造的な生き方の一面を知ることができる。話を聴く方も触発されて創造的になり、2 人にとっても楽しみな時間となっている。このようにラジオニセコが過去にニセコ町の歴史を形成してきた地の人の紹介の場所になっている。

会長と事務局長の 2 人は「多くの人が語りたがっているが、毎月１回１人にしか聞けないという課題も見えてきた」「ラジオを通して多様な人がいることを知ってほしい。番組を聞いて好奇心を持ってほしい」と願っている。

（３）ラジオニセコを聴く地の人

ニセコ町では、地域おこし協力隊（以下、協力隊）が毎週月曜日にラジオニセコで活動報告を行っている。ニセコ町の協力隊は所属制を採っており、1 年目は所属先（観光協会、商工会、道の駅、役場など）でまずは町のことを知ったり、住民との関係を構築し、3 年目に向けて自主活動の割合を増やしていく。農作業しながらラジオニセコを聞いている農家も多く、協力隊の所属先の１つである道の駅の直売所で、ラジオに出演した協力隊に「ラジオ聞いたよ」と話しかけたり、ラジオで「農家の手伝いにいった」という話を聞いた農家が、「うちにも来てほしい」と依頼したりして、農家と協力隊がつながることも多い。

また、ラジオニセコで流れる地元企業の CM を聴いて、町民が地元の商店で買い物をすることで、地域経済循環にもつながっている。

７　移住者とラジオニセコの関わり

（１）新しいコミュニティの形成

ある日、ラジオに出演した町民が旭川出身だと話したことで、観光協会の職員と同じ高校出身だということがわかり、2 人がつながった。単に人の紹介にとどまらず、人と人がつながることで、新しいコミュニティが生まれる。同じように温泉好きの人たちがラジオでつながり、ニセコ温泉部設立の一助になった。

ラジオニセコ放送劇団へ参加している方は、結婚して夫の転勤についてきた女性も多く、知り合いのいない町で放送劇団がコミュニティを作る場にもなっている。この放送劇団は 2017 年に北のラジオドラマ大賞コミュニティ FM 賞を受賞している。

（２）ラジオニセコを通した協力隊の活動紹介

ニセコ町には現在 3 年目 5 人、2 年目 1 人、1 年目 4 人の合計 10 人の協力隊がいる。協力隊の人数が増えて、今まで年 1 回行っていた協力隊の成果報告会の一人当たりの報告時間が短くなったこともあり、2017 年 4 月から報告会だけでは伝えきれない普段の活動内容をラジオニセコで伝えている。番組ではイベントの告知だけではなく報告もできるので、イベントでお世話になった方のことを紹介できる利点がある。今まで 2 回、イベントに来てくれた町民に出演してもらったこともある。

しかし、ヒアリングによると協力隊の人数が多いこともあり、限られた時間の生放送の中で、一方的な「活動報告」になってしまっている面もあるようだ。実際どれだけ聞いているのかリスナーからのフィードバックがないので、例えば居酒屋やイベントに出かけて町民や観光客にインタビューして収録して放送するなど、町民や観光客とやりとりしたり、

町内事業者と一緒に番組に出て、「ラジオ聞いた人は 100 円引き」などしたら、聞いてくれる人も増えるのではないかとのことだった。

現在、配属先がラジオニセコとなる協力隊を募集しているので、協力隊がラジオニセコに配属されたら、もう少し自由な番組づくりができるのではないかと期待している。

（3）ラジオニセコを通した国際交流

ニセコ町では、現在、中国、アイルランド、ドイツ、アメリカ出身の 4 人の国際交流員が、地域の多文化共生や異文化理解、国際理解を推進することを目的として、翻訳・通訳、外国人住民の支援や観光客の手伝い、交流イベントの実施、語学教室や学校訪問など様々な仕事をしている。

こうした国際交流員の存在を町民に知ってもらうため、2012 年 12 月から国際交流員独自の番組が放送されている。以前は日本語だけの番組だったが、日本語がわからない外国人住民も多いので、ラジオニセコからの依頼で英語だけの番組も 2017 年度から開始した。

毎週金曜日に、1 週目出身国の文化紹介（日本語）、2 週目出身国の文化紹介（英語）、3 週目ゲスト出演もありのニセコライフ（英語）、4 週目ニセコライフ（日英混合）を収録して放送している。

役場では主に通訳や翻訳業務をしており、自分の国の文化紹介はできないため、ラジオで出身国を紹介できる場があるのは国際交流員にとっても大きなメリットになっている。通訳などで初めて会った方から「ラジオ聞いたよ」と声をかけられたり、インターナショナル・スクールの校長先生にゲスト出演してもらったあとに、校長先生から別の外国人ゲストの紹介があり、新しいつながりが生まれたこともある。

ヒアリングによると、外国人住民はせっかくニセコ町に住んでいても交流していない人が多いので、ラジオにゲスト出演することで町の一員としての役割や自分も他人とつながっていることを認識する場になっているようだ。ゲスト出演した方は全員インスタントカメラで写真をとってメッセージとともにラジオニセコに飾られる（写真 3）。

国際交流員たちは「自分たちの知り合いに限らず、もっと多くの外国人ゲストに出てもらえるような番組づくりをしたい」「ニセコ町に住む外国人もみんなだれかの紹介で友人になっている。何か問題があれば国際交流員が解決できるかもしれないので、ラジオを通して国際交流員がニセコ町役場にいるということを多くの方に知ってもらいたい」と話してくれた。

写真 3　今まで出演した方々の写真

（4）訪問者とのつながり

開局 2 年目のとき姉妹都市の滋賀県高島市からの訪問団として番組に出演した子どもが、5 年後「ラジオニセコに出たことが楽しかった」といって弟や友達をつれてラジオニセコに遊びにきた。このように住民ではないが、新しいつながりがつながりを生んだこともある。

８　運営を支えるスタッフの志

開局初年度からラジオニセコに関わる現局長と今年度新たにスタッフとなった 2 人の局員、来春スタッフになるために研修中の局員にラジオニセコへの想いをヒアリングした。

（1）局長

開局初年度は札幌の三角山放送局の方が局長を務めたが、2年目から局長となり、6年目を迎えた。最初は放送することが目的だと思っていたが、ラジオを通して人と人がつながったときに、コミュニティづくりが目的で、放送は手段という意味が理解できた。

ニセコ町は他の自治体に比べて、多様性を受け入れてきた町。今後も様々な人の出入りが拡大していくと、多様な人が共存するためのルールが必要になるのではないか。それぞれの考えは認めつつ、「ニセコ町はこう」というルールを構築するお手伝いをしたい。

ニセコ町はまちづくり基本条例があり、情報発信は活発だが、情報共有はあまりできていないと感じる。広報はできているが、広聴はできていない。町民の意見を聞く場が少ないので、今後町民の考えを聞くような番組をつくってみたい。

組織としては、観光協会の一部ではなく、ラジオニセコとして独立したいと考えている。

（2）局員（4月新卒採用）

中学3年生のときに聴いたラジオがきっかけでラジオと音楽が好きになった。10代向けの番組でパーソナリティが真摯にリスナーに向けて言葉を投げかけていた。話している相手は「みんな」でも、あくまで「あなた」に向けて話しているのが伝わってきて、とても嬉しかったし格好よかった。

大学で地域メディアのゼミに所属。三角山放送局の社長がゼミの担任でコミュニティ FM を題材に「地域メディアの役割」を学ぶ。大学 3 年生のときフィールドワークでラジオニセコを視察。1日目に局長の話を聞き、2日目にラジオ出演。就活解禁から2ヶ月がたち、動きが遅い自分にゼミ担任から「ラジオニセコが人を募集しているから受けてみたら」の声かけでラジオニセコに応募した。

入局してからラジオがまちづくりの手段という意味、災害時の役割、行政の情報の伝達の重要性に気づいた。番組では音楽や言葉を大切に伝えたいと考えている。

（3）局員（7月採用）

前々職の北海道立図書館で司書をしていたとき（2002～2003 年ころ）に、「あそぶっく」（NPO法人に指定管理委託しているニセコ町の図書館）の立ち上げ支援に関わった。その後もボランティアで「あそぶっく」の内装や本の並べ方のお手伝いをした縁があり、ずっとニセコ町の図書施設が気になっていた。図書館の運営の仕方が他の自治体とは違っており、いろいろ先進的なことにチャレンジする自治体だと感じ、ニセコ町で働いてみたいという気持ちがあった。

求人誌でラジオニセコの募集を知り、ニセコ町に住む知人を通してラジオニセコが町民の生活に密接に結びついているのを感じていたので、そういうところで仕事をしてみたいと思って応募した。多くの人と知り合えること、また自分からいろいろな人たちのところに飛び込んでいけるところに魅力を感じている。

（4）研修中の局員（来春4月採用予定）

人の話を聞くことでその人を喜ばせたいという理由でアナウンサーを目指して、大学 3年生の秋頃から全国のラジオ局、テレビ局を受けていたが、なかなか通らなかった。自分のやりたい「話を聞いてその人を喜ばせる」という仕事は大きなテレビ局やラジオ局のアナウンサーに求められていないのではと感じ始めていたときに、求人誌でラジオニセコの求人をみつけた。

2018年2月に大学のゼミでニセコ町のまちづくりの視察に来たときにラジオニセコにも出演した。そのときにパーソナリティの方が「ラジオニセコで地域のコミュニティを作りたい、地域の人たちのつながりをつくりたい」と話していたのが印象に残っており、そんなラジオニセコなら、人と関わって話を聞くことで人を喜ばせる仕事ができるのではと思って、ラジオニセコを選んだ。

9　地の人・移住者をつなぐコミュニティFMとして

（1）地の人と移住者のラジオニセコへの関わりからわかること

6章で示したとおり、地の人の関わりからは、ニセコ町を離れる若者にとってラジオニセコが地元への愛着や将来帰りたいと思ったときの拠り所となっていることがわかる。

「土香る会」の番組の「この人に聞く」コーナーでは今まで地道に有島の遺訓「相互扶助」を受け継いできた地の人や有島に関わる移住者双方を発掘する場となっている。なにより土香る会自身が番組で多様な人から話を聞くことを楽しんでいる。ヒアリングからは多くの人が語りたがっているという意外なことも知ることができた。

ラジオを聴く地の人の存在も大きい。特に農家は地の人が多く、ラジオを聴きながら農作業することが多いので、ラジオを通して協力隊や国際交流員の人柄や活動内容を知り、出会う機会があればそこからつながる可能性が高まる。

移住者の関わりからは、ラジオニセコ放送劇団が夫の転勤についてきたことで組織に属さない女性たちの新たなコミュニティが形成されていた。

協力隊は、卒業後にニセコ町への移住を考えている方も多く、移住者よりももっと外側に位置づけられる存在である。移住前からラジオを通して町民に存在を知ってもらい、イベントや農業支援という形で町民とつながることで、ラジオニセコが移住する可能性を高めていると考えられる。

ニセコ町は外国人住民が増えてきているとはいえ、一時的にしか住まない外国人も多い。しかし、一時的にでもニセコ町に住む外国人がラジオに出演することで、町の一員としての役割や居場所があることを認識する場になっている。国際交流員による国際交流だけでなく、出演した外国人にとっても地域の担い手としての意識を持ってもらえる。

人口規模から考えると、ボランティアパーソナリティとして85人もの方が関わっているのはかなり多い。うち20人が外国人というのもニセコ町の特徴である。

（2）ラジオニセコの役割と課題

全国地域リーダー養成塾「地域活性化のための情報化戦略」飯盛先生の講義では「地域づくりとは、効果的なプラットフォーム設計と言える。今までつながっていなかった人が

つながり、資源を持ち寄り、シェア、活用を実現すること、これらが常に実現できる仕組みづくり＝プラットフォームの設計が重要である」と話された。ラジオニセコも効果的なプラットフォームとして、つながる人達がボランティアパーソナリティとして関わるなど、提供できる資源を持ち寄り、ラジオニセコを通して交流しているといえる。

もちろん、災害時の防災情報の受発信、平時の役場からの情報提供、地元企業CMによる地域経済循環もラジオニセコの重要な役割だ。

局長の話からは、ラジオを通した役場からのお知らせは「情報発信」にとどまっていることが多く、いかに「情報共有」にまで持っていけるかが課題であることがわかった。ラジオを通して「広報」するだけでなく、町民の意見を聞く「広聴」という視点が重要であるということに気づくことができた。

今年度ラジオニセコを就職先として選んでくれた 3 人は、過去に視察や図書館運営などでニセコ町となんらかの関係を持った上でニセコ町のまちづくりに魅力を感じて来てくれた。この期待を裏切らないよう、できるだけ居心地のいい職場であってほしいと思う。

実はラジオニセコのスタッフは入れ替わりが激しく、今まで多くの若いスタッフが辞めていった。辞める理由はラジオニセコが観光協会の放送部門として位置づけられているものの、観光協会に組織的な問題があり、しっかりと現場を知り指揮する人がいないということが大きいようだ。開局当初同じだった総務・経理及び就業規則も現在は異なる。こうしたことから局長はラジオニセコとして独立したいと希望している。

（3）ラジオニセコへの提案

これまでのヒアリングを受けて、地の人・移住者をつなぎ、さらに魅力あるコミュニティFMとして継続するために、下記3点を提案したい。

<u>①イベントや飲食店に出かけて地域の人の声を届ける番組づくり</u>

ヒアリングした方のほとんどが町民や観光客とやりとりをしたり、ゲスト出演してもらう番組づくりを行いたいとのことだった。このことは町民ワークショップで出された外国人住民・観光客との円滑なコミュニケーションが求められていることからもニーズが大きい。「情報発信」にとどまらず「情報共有」のため、一方的に伝えるのではなく地域の人の声を聴くことでさらなる交流が生まれる。出かけるのは協力隊など番組をもつ団体が行い、ラジオニセコのスタッフへの負担は極力軽減することが必要である。

<u>②ラジオ出演しなくても自由に出入りできるカフェの併設</u>

協力隊からは「ニセコ駅前にあるという立地、概観からカフェと間違えて入る人がすごく多い。ラジオだけでなく、いっそのことカフェもやったらどうか」「毎週土曜日に綺羅乃湯でやっている公開生放送『ニセコラジオカフェ』にあまり人が来ていない。公開生放送のときには知名度のある人に出てもらったら、人が見に来るのではないか。ニセコ地域には実は有名人がたくさん観光に来ているので、公開生放送のときにラジオにも出演してもらったらどうか」といった提案がなされた。

有名人のラジオ出演には相手方の意向もあるので様々な問題があるだろうが、カフェは大変いいアイデアだと思う。小さなスペースでも自由に出入りできるようなカフェを併設すれば、さらに観光客や町民同士の垣根が低くなり、新たなつながりが生まれるのではな

いだろうか。

全国地域リーダー養成塾「地域コミュニティの再生」名和田先生の講義では、「コミュニティカフェの可能性として、不特定多数の人に開かれた空間、場所があることで新しいアイデアや事業が生まれる」と話された。ラジオニセコは、放送劇団員の練習やボランティアパーソナリティの待合の場にもなっていることから、コミュニティカフェの条件が揃っている。カフェの対応については、セルフサービスにしたり、隣の綺羅乃湯のカフェスペースや町が農協の倉庫群をコミュニティスペースとして再整備した駅前中央倉庫群と連携するなど考えられる。

③ラジオニセコ単体組織として独立

土香る会の 2 人はラジオニセコに対して「町民から出資を募るなどして NPO 法人として独立してはどうか」「土香る会と羊蹄まちしるべ研究塾はほかの音楽番組と比べて異色。文学や地域の歴史を語る番組なのでラジオを聞いている人は少ないと思うが、このような番組の存在意義はある」「今後、もっと生活に根ざした番組ができたらいいと思う。行政がリードするとつまらない番組になるので、町民がリードするのが大事」と考えていた。

ラジオニセコは観光協会に位置づけられているが、ラジオニセコに関わる人たちが支援・支持するのであれば、今後独立して運営していくことも十分考えられる。なによりラジオニセコの運営を支えるスタッフが働きやすい職場であることが一番重要だと思う。防災ラジオという面から町からの委託費・補助金も入れつつ、今後、カフェやイベント開催など事業内容を多角化していくことで経営基盤を確立していけば、行政や町民の支持も得やすくなると考える。

私は役場の担当業務で、CO_2 削減に向けて自分ごとと捉えてもらうよう自分の生活と関わりが深く興味がわく話題を取り上げ、行動に移すきっかけづくりを目指しカフェスタイルの環境イベント「エコナイトカフェ」を実施してきた。その際に何度かラジオニセコに収録してもらい、後日放送してもらった。今後も、魅力あるイベントを開催し収録して後日放送してもらうことで魅力あるラジオ番組のお手伝いをしていきたい。

また、今年度採用のラジオニセコのスタッフも移住者である。私自身少し前に移住した者として、新しく移住した方やこれから移住する方に地の人の活動や想いを伝えるなどして、つなぎ役を果たしていきたい。

【引用・参考文献】

・ようこそニセコ町へ（ニセコ町まちづくり視察資料）
・数字でみるニセコ（ニセコ町統計資料 2018 年 5 月版）
・平成 30 年度株式会社ニセコリゾート観光協会放送事業グループ事業計画書補足資料
・総務省電波利用ホームページ http://www.tele.soumu.go.jp/j/adm/system/bc/index.htm
・日本コミュニティ放送協会 https://www.jcba.jp/
・北郷裕美「コミュニティ FM の可能性」（青弓社）2015 年
・米村秀司「岐路に立つラジオ～コミュニティ FM の行方」（ラグーナ出版）2015 年